

平成 30 年第 2 回
トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境監視委員会
<会議録>

1 日時

平成 30 年 10 月 9 日（火） 午前 10 時 30 分～午前 11 時 55 分

2 場所

愛知県産業労働センター ウィンクあいち 10 階 1002 会議室

3 報告

- (1) トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境監視委員会運営要領
- (2) 平成 30 年第 1 回委員会における指摘事項及びその対応
- (3) 猛禽類とミゾゴイ（サギ類）の営巣状況（平成 30 年次）

4 議事

- (1) 環境調査計画書（平成 31 年次版）

5 配布資料

- ・ トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境監視委員会運営要領（案） [資料 1]
- ・ 平成 30 年第 1 回環境監視委員会（平成 30 年 3 月 12 日）における指摘事項及びその対応 [資料 2]
- ・ 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業における猛禽類とミゾゴイ（サギ類）の営巣状況（平成 30 年次） [資料 3] 一部非公開
- ・ トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境調査計画書（平成 31 年次版）（案） [資料 4] 一部非公開

6 出席者

(1) 委員（五十音順）

大畑 孝二	委員	(公益財団法人日本野鳥の会施設運営支援室室長)
織田 銑一	委員	(元名古屋大学教授)
北田 敏廣	委員	(豊橋技術科学大学名誉教授)
鷺見 哲也	委員	(大同大学准教授)
高橋 伸夫	委員	(愛知県野鳥保護連絡協議会議長)
谷口 義則	委員	(名城大学准教授)
成瀬 治興	委員長	(愛知工業大学名誉教授)
柳澤 紀夫	委員	(公益財団法人山階鳥類研究所評議員)

(2) 事務局

愛知県企業庁、トヨタ自動車株式会社 等

(3) 傍聴人等

傍聴人 0 名

7 会議の概要

(1) 開会

(2) 報告

ア トヨタ自動車新研究開発施設に係る環境監視委員会運営要領

- ・資料 1 について、事務局から報告した。
- ・要領（案）について、委員の承認により本日付けで一部改正が施行された。

イ 平成 30 年第 1 回委員会における指摘事項及びその対応

- ・資料 2 について、事務局から報告した。

ウ 猛禽類とミゾゴイ（サギ類）の営巣状況（平成 30 年次）

- ・資料 3 について、事務局から報告した。

(3) 議事

ア 環境調査計画書（平成 31 年次版）

- ・資料 4 について、事務局から説明した。

<質疑応答>

（大畑委員）

今年次は久しぶりに事業地内でミゾゴイの繁殖が確認され、喜ばしいことである。しかし、途中で繁殖をやめていたようである。途中で繁殖をやめてしまった原因はわからないが、可能性として調査圧も考えられる。繁殖への影響については、当年だけで見れば影響は出ないかもしれないが、翌年まで考えると、繁殖した場所の近くに来なくなってしまう等の影響があるかもしれない。今年次にミゾゴイの巣を確認した時期は、一番敏感な時期だと思うが、調査員は林内踏査調査をどの程度行ったのか。

また、近年は毎年 4～5 箇所未特定巣が確認されているが、これは敏感な時期に林内に入って巣を探したことによって、ミゾゴイが巣を放棄してしまっただけではないか。ミゾゴイの巣は、巣立った後でも糞痕や食痕等が残るので、痕跡を確認することで繁殖を確認すれば良いのではないか。そのため、5 月中旬以降に実施している林内踏査調査の時期について、雛が孵っていると考えられる 6 月下旬頃にずらした方が良い。

（高橋委員）

私も同意見である。サシバもミゾゴイも、事業地内で営巣して残ってくれることが一番大事である。調査をして巣を見つけることよりも、何とか残す方向で頑張りたい。そのためには、一番敏感な時期を外して調査することが大事である。

また、今回ミゾゴイが営巣した場所周辺は、ハシブトガラスが非常に多い。そのため、なるべくハシブトガラスに見つからないように注意して調査をしないとイケない。

（事務局）

調査時にミゾゴイの巣付近に近寄ったが、できるだけ調査圧に配慮して、ごく短時間の確認とし、写真撮影後は速やかにその場から離れた。また、下層植生の少ないルートを通り、尾根等を避け、ミゾゴイに警戒されないよう

に配慮しながら巣を探した。なお、鳴声確認調査結果を踏まえて目星をつけて踏査に入っており、むやみに踏査をしているということはない。

委員からご指摘のあったとおり、今回の営巣場所周辺でカラスが多いことは承知している。そのため、カラスがいなくなるまで踏査を控える等の配慮を行った。

ミゾゴイの調査時期については、本日欠席の芹沢副委員長から、「ミゾゴイの営巣箇所がわかっているならば対策をとることができるが、調査をしなければ営巣箇所がわからないため、工事内容の配慮等ができない。どちらの影響が大きいかである。育雛を放棄させてしまうことになると本末転倒であるため、鳥類を専門とする3委員がどちらを良いと判断されるかである。3委員がそろって5月の林内踏査調査をやめるべきということであれば、それで良い。ただし、その場合には、当然、工事以外も含めて配慮はできないということである。」という意見を頂いている。

(高橋委員) 工事もかなり進んでおり、改変区域の形がほぼ決まってきた。工事区域の周辺で繁殖を始めた個体について、新しい工事を始める場合は配慮が必要であるが、既に行っている工事であれば、騒音について特に気にする必要はない。巣の直近で発破をするようなことさえなければ、巣の近くで工事をして大丈夫である。

(柳澤委員) ミゾゴイの巣を見つけに行く調査については、ミゾゴイがいなくなるまでの間に見に行けば良い。ミゾゴイについては詳しい知見が得られていないので、大畑委員と高橋委員が心配する部分もあると思う。本当は足環や発信機を付けて調査を行いたいが、アセスの調査でそこまで対応することは難しいと思う。もし本事業の調査が始まる時期からそのような調査ができていれば、今頃にはかなりわかったことがあっただろう。

(高橋委員) 私としては、そのような調査は本事業ではなく、ミゾゴイがより多い地域で実施して欲しい。これだけ大規模に改変されているところで、そのような調査を行うのは良い方法ではない。

(大畑委員) ミゾゴイの生態については本当によくわかっていないので、より慎重になるべきであるが、ミゾゴイの繁殖地はほぼ日本だけなので、ミゾゴイの生態を調べることは必要だと思う。ただし、本来は研究者が調べるべきであり、本事業に結び付ける話ではないのかもしれない。

繁殖ステージの比較的早い時期にミゾゴイを調査するのは、モニタリングと、早めに営巣箇所を特定して工事影響を防ぐという2つの目的がある。ミゾゴイと同様にモニタリングを行っている種として猛禽類のサシバが挙げられるが、サシバは雛の数まで含めて調査している。ミゾゴイについても、雛の数まで把握する調査計画になっているのか。また、巣の位置がわからない場合であっても、鳴声確認調査結果から、ミゾゴイが営巣している可能性がある場所での発破を中止する等、工事内容について配慮し、工事による影響を防ぐ方法をとることは可能か。

(事務局) 雛の数について、猛禽類は可能な限り巣立ち雛数をカウントしている。一方、ミゾゴイは営巣事例が少なく、巣立ち雛まで確認できた事例が過去にあまりない。

鳴声確認調査結果に基づく工事内容の配慮については、工事も終盤に差し

掛かり、また1メッシュのサイズも約1km²と非常に広いため、広範囲に工事を中断することは難しい。

(高橋委員) ミゾゴイは、毎年同じ巣を使用するとは限らず、また前年と同じエリアで営巣するわけでもない。私としては、営巣期はむやみに調査を行わず、営巣後に巣を見つけ、繁殖の痕跡を確認できれば十分である。無理やり工事を中断させようとは思っていないので、なるべく協力してミゾゴイやサシバを残して欲しい。ミゾゴイやサシバが一旦いなくなってしまうと、戻すのはとても大変なので、配慮に関する様々な取組を継続して欲しい。

(大畑委員) 鳴声がしたメッシュ全てではなく、鳴声がよく確認され、踏査に入ろうとする場所だけでも配慮できないか。今年次、工事区域周辺の部分で、鳴声がよく確認されたため実際に踏査に入ったところは何箇所あるか。

(事務局) そのような資料が手元にないためわからない。

(大畑委員) ミゾゴイがかなり鳴いて、実際に踏査に入った場所は、それほど多くないと思う。林内踏査調査の時期については、柳澤委員は巣立つ前までに極力遅らせて良い、高橋委員は巣立った直後が良いという意見である。私は、繁殖ステージは個体によって異なるので、雛はおらず、痕跡しかないというケースも出てくるかもしれないが、基本的には雛が巣立つ寸前までに確認しておくということで良いと思う。

工事内容の配慮については、鳴声が多く確認された場所でも、ほぼ同じような工事の継続であれば、そのような状況の中で入り込んで来たつがいなので、特に配慮をせずとも大丈夫だろう。今回、ミゾゴイの巣の場所がわかったので、通常実施している農道脇の草刈等を中止してもらったが、そのまま実施しても影響はなかったかもしれない。

繰り返しになるが、ミゾゴイの生態については不明なことが多い。柳澤委員から発信機調査の提案があったが、事務局としての見解があれば教えて欲しい。

(事務局) 本事業のアセスに係る調査としては計画していない。

(成瀬委員長) 鳥類を専門とする3委員は、調査時期を遅らせた方が良いという意見が大勢を占めた。調査時期の変更ということで良いか。

(大畑委員) 環境調査計画書の文言も変えた方が良い。現在の記載でも6月下旬に調査することは可能だが、少なくとも「5月」という言葉は削除した方が良い。委員会の場で慎重に対応することを議論しても、実際の調査員は、計画書の記載のとおり調査を行うこととなるので、文言も変更したい。

(高橋委員) 事務局の担当者も変わるので、文章できちんと示しておいた方が良い。

(柳澤委員) 調査期間等の林内踏査調査に係る2行は、「5月」を「6月」に、「6月」を「7月」に変更してはどうか。

(高橋委員) その修正案で良い。年次ごとに調査会社が変わるので、きちんとそのように書いておいて欲しい。

(事務局) 環境調査計画書p17の調査期間等の3行目以降について、「林内踏査調査は、6月中旬から工事区域周辺で2回、7月以降に調査地域・地点全体で1回の調査を実施します。なお、6月の調査は、鳴声確認調査結果を踏まえ、特に調査圧に留意して調査期間等の見直しを行います。」と修正したい。

(大畑委員) 修正文案はそれで結構である。6月中旬以降に調査した時でも、営巣が確認されれば、可能な範囲で工事内容の配慮をお願いする。

(鷺見委員) 中工区は造成工事が完了している。また、東工区は造成する範囲が確定しており、新たに造成する範囲がない。そのため、先ほどの議論は了解できる。一方、西工区はこれから新たに造成する場所があるため、西工区でどのように対応するのかを確認したい。今回の議論で、事前的な調査及び対応をしないことになったが、鳴声確認調査は実施するので、その結果に基づく工事側での対応を検討して欲しい。環境監視委員会として、工事影響に対して、何もケアしないのは良くない。それについては運用で対応していくのか。

(事務局) 4月から5月に実施する鳴声確認調査において、正に改変しようとしている辺りで営巣が考えられる結果が出た場合は、鳥類を専門とする委員に相談させて頂き、対応したい。

(高橋委員) 繁殖途中で改変することのないように、当年に改変する予定の場所は、ミゾゴイが渡って来る前から伐採や土木工事を開始する形で改変しておいた方が良い。また、発破が予定される場所でも、渡って来る前から発破しておく方が良い。事前に改変区域の近くに巣を作らないようにする対応をした方が良いという趣旨である。そのような対応をするために、できれば繁殖期の前に私達に相談して欲しい。

(成瀬委員長) 本調査計画書を変更文案に修正することで承認してもよろしいか。

(各委員) 承認する。

(4) その他

<質疑応答>

(織田委員) イノシシとニホンジカの対策について、事業地の外周にフェンスを設置予定である旨を聞いている。これは今までの計画にない追加対策だと思うが、その効果等について調査する計画はあるか。

(事務局) ニホンジカについては、平成27年次から調査しており、今年次も事業地内及び周辺地域で調査する予定である。イノシシについては、個体数の推定等の事例があまりないので、現時点では生息状況の把握は困難だと考えている。

(織田委員) フェンスの設置に関する進捗状況について説明して欲しい。

(事務局) 各工区の状況について説明する。西工区は、今年3月に工事着手し、現在は約30%完了している。工事の出入口として使用する一部区間を除き、今年度中の完成を目指している。中工区は、平成31年度の完成を目標にフェンス設置工事を実施していく。東工区は、今年10月に着手し、平成31年度の完成を目標にフェンス設置工事を実施していく。

(高橋委員) 新東名高速道路では、道路沿いを完全に囲い、小動物も入らないように、ガードレールの周りに金網をかける等の措置を実施している。イノシシやシカが車に当たると大事故になるので、今のうちから対策をするとともに調査しておいた方が良い。

(谷口委員) 今回設置するフェンスはどのような構造なのか。小動物の移動も妨げる構

造なのか。

(事務局) フェンスの構造は、織田委員から助言を頂き、決定した。基本的には、10cm×10cm のメッシュ状となっており、小動物はメッシュの間から通り抜けができるが、イノシシやシカは通れない構造である。高さ方向には、1m50cm のメッシュフェンスの上に、2m50cm まで番線を設置している。

(北田委員) 土地を改変すると、それに伴って温室効果ガスの吸収量が減る。評価書では、「地形改変並びに造成地及び工作物の存在」に伴う温室効果ガスについては、すべての工事が完了し、施設が完成した時期を予測対象時期としている。しかし、用地造成が完了した段階で、温室効果ガスの吸収量の減少については概ね確定する。工事計画を見ると、平成 32 年度末で用地造成工事が完了するため、その後、温室効果ガスに関する影響を中間評価してはどうか。その数値については、評価書では 1 年で約 1,500 トンの CO₂ 吸収量が減少することになっているので、10 年で約 15,000 トンと積み重なっていくものである。そのため、将来を見据えて、用地造成の完了後に評価してはどうか。

(事務局) CO₂ について、どのような取り扱いとするか検討し、改めて相談したい。

(5) 閉会

以上